

寄稿：何故「核」を「原子力」というのか

中井 武（化学連合副会長、東京工業大学名誉教授）

福島原発事故以来、新聞紙上で「原子力」という言葉を見ない日はない。ここで論じたいことは、筆者が事故以前から長くもっていた疑問- 世界では殆ど使われていないこの「原子力」（英語では atomic power or energy）という用語が、日本では何故こんなに広く一般的に使われるのかと一いう問題である。「原子力発電所」は、多くの外国では、それぞれの国の言葉で「核発電所」とよばれている（漢字を使う中国でも）。英語では nuclear power plant であり、atomic power plant とはいわない。事実、日本の新聞も英語版では nuclear power plant と書いている。原子炉の英語は nuclear reactor である。また、おかしなことに、アメリカの nuclear regulatory committee のことを日本のマスコミは NRC という略名をつけながら米原子力規制委員会と誤訳（？）して伝えている。このように日本では、「核（nuclear ; nuke）」を「原子力」という言葉で置き換えていることが多い。ところが、nuclear weapon は日本でも核兵器といい（原子力兵器とはいわない）、北朝鮮やイランの核開発は、決して原子力開発とは云わない（彼らはそう云いたい？）。さらに奇妙なことに、nuclear physics や nuclear chemistry はそれぞれ核物理学、核化学というのに、nuclear engineering は何故か原子力工学という。日本原子力学会の英語名はさすがに、Atomic Energy Society of Japan であるが、同学会が米国原子力学会とよんでいるのは American Nuclear Society である。このように、日本では「原子力」＝「核」であり、それらは使い分けられているが、使い分けの理由も基準もよくわからない。外国では、こんな使い分けはほとんど見られない。この点に関して、原子力専門家やマスコミの意見を聞きたいものである。多分、日本では核アレルギーが強いので、核エネルギーを民生利用する時は、できるだけ「核」を避けて「原子力」を用いてきたのではないだろうか。今批判を受けている「原子力村」は、まさに「核」よりも「原子力」という言葉を好む人達の村なのかもしれない。原発事故の一周年を迎えるのを機に、行政もマ

スコミも専門家も、「原子力〇〇」を世界標準の「核〇〇」に統一してはどうか。そうすることによって、今後の核政策（原子力政策ではなく）や核安全基準が、先入観にとらわれることなく、世界基準の枠組みの中で中立的かつ根本的に議論できるようになるのではないだろうか。